2013 年 4 月 6 日

巻頭言「行動スタイルの変化」

林　克（静岡県労働組合評議会　議長）

3.11 以降の国民の中に、「原発はなくしたい」の思いが広く深く浸透しているのはみなさんご承知の通りだと思います。私がもうひとつ注目しているのは、それを求める人々の行動スタイルの変化です。

静岡県評は、1967 年に当時の産経新聞が浜岡に原発を設置することをスクープした 1 週間後に現地にオルグに入った歴史を持ちます。しかしその運動は、どこそこの組織に何人動員してほしいという、いわゆる「動員型」の運動です。戦後の社会運動の中で、このスタイルは長い間主流でした。

ところが昨年、大飯原発再稼働に反対する首相官邸前行動をみると、最初 300 人から始まって、日を追うごとに膨れ上がり、6 月末の大飯が動こうとするときには 20 万人に達しました。これは組織で動員されたのではなく、それぞれが主張したいから出かけていくという「参加型」の運動です。誰に言われたのではなく、自らの意思で自らの主張を持って参加するというものです。

しかもそれを知る媒体として、インターネットが重要な役割を果たしたことがあげられます。ある新聞社が官邸前行動に参加した人たちに対して世論調査すると、半数以上の人たちがフェイスブックやツイッターといったソーシャルメディアによって参加したことがわかりました。

静岡においても、首相官邸前の行動に呼応する取り組みをやろうと私も含めて 3 人の呼びかけで「再稼働反対アクション@静岡」を 7 月 20 日から実施しました。フェイスブックで友達を招待し、ツィッターで拡散して参加者を集めました。東京の官邸前といういわば匿名性の高い空間とは違って、静岡一のメインストリードで実施をするためにかなりハードルは高いのですが、最高時 100 名にも及ぶ人が参加しました。

これまたびっくりするのがツイッターを見てきたという若者が、たどたどしく脱線しながらも自らの主張をメガホンに向かってしゃべります。これまでどこそこの組織で発言してくださいと割り振ってきた身としては、たいへんな驚きです。そして「原発いらない」「電気は足りている、足りないのは愛」など自分でつくってきたプラカードを掲げて参加するのです。

もちろん旧来型の運動を代表する私としても存在意義は十分あります。メガホンを用意したり、警察との折衝にあたったりと大忙しです。先日「原発なくす会」にお呼びしたミサオ・レッドウルフさんが記念講演の中で、「旧来の運動と 3.11 以降に参加した人が手を結ばない限り政府に方針変更させることはできない」といった言葉が腹に落ました。